一橋大学大学院言語社会研究科 L'École doctorale "Langues et Sociétés" – Université Hitotsubashi

文学・証言・生表象

文学研究と歴史記述研究の対話

Littérature, Témoignage, Représentation de la vie

Dialogue entre l'étude littéraire et l'étude historiographique

ニコラ・シャピラ **Nicolas SCHAPIRA**
（マルヌ・ラ・ヴァレ大学）
ダイナ・リバール **Dinah RIBARD**
（社会科学高等研究院）

農村における政治と文学
――レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ

Politique et littérature au village. Rétif de la Bretonne

コメンテーター Commentateurs

桑瀬章二郎 **Shojiro KUWASE**（立教大学）
政治的概念としての「人民（あるいは農民）」
Peuple (ou Paysan) comme concept politique

ジュディト・リオン - カン **Judith LYON-CAEN**
（社会科学高等研究院）
クリスチアン・ジュオー **Christian JOUHAUD**
（社会科学高等研究院）
フランス組曲　レチフからネミロフスキーへ　農村におけるフランス
Suites françaises : de Rétif à Némirovsky, la France au village

日時　2013年9月28日（土）
14時より
le 28 septembre 2013
à partir de 14 h

場所　一橋大学 東キャンパス
国際研究館 4F 大教室
（中央線「国立」下車）
Université Hitotsubashi
Campus-Est
LS/CGE Building, 4e étage
La grande salle
(Kunitachi, La Ligne Chuo, JR)

言語　フランス語／日本語通訳つき
La conférence en français
avec la traduction japonaise
通訳：辻川慶子・久保昭博

連絡先　森本淳生（一橋大学）
atsuo.morimoto@r.hit-u.ac.jp

主催　「文芸事象の歴史研究会」／共同研究「生表象の動態構造」
このシンポジウムは、基盤研究 C『マザリナードと論争研究――歴史社会学と文学社会学の境界領域研究』（研究代表：野呂　康、平成 23 年度～25 年度、課題番号：235209110001）の助成を受け、基盤研究Ｂ『生表象の動態構造――自伝、オート・フィクション、ライフ・ヒストリー』（研究代表：森本淳生、平成 22 年度～25 年度、課題番号：22320064）との共催で実施されます。

Politique et littérature au village. Rétif de la Bretonne.

Nous proposons une lecture politique de *La Vie de mon père* de Rétif de la Bretonne (1778) qui est en même temps une réflexion sur le témoignage. Ce texte a en effet été au centre d'un débat méthodologique important entre plusieurs spécialistes de la littérature du XVIIIe siècle et un historien, Emmanuel Le Roy Ladurie ; et ce débat portait précisément sur la possibilité d'utiliser *La Vie de mon père*, ouvrage dû à un paysan devenu écrivain, comme témoignage sur la vie rurale. Nous avons constaté que malgré l'opposition entre disciplines sur la question de la transparence du texte littéraire, et malgré les divergences idéologiques entre participants à ce débat, tous partageaient une vision de la littérature comme expression de la vérité de son temps sous la forme de mythes (en l'occurrence un récit mythique des origines de l'intellectuel issu du peuple). Nous pensons que Rétif ne décrit pas le village et la vie rurale du point de vue de l'intellectuel venu du monde rural qu'il est, mais qu'il érige par l'écriture le village en lieu politique, lieu d'un pouvoir patriarcal qui se donne comme modèle pour le pouvoir royal ; c'est par là que selon nous son livre est une action de témoignage.

農村における政治と文学──レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ

本講演では、フランスの作家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの『我が父の生涯』（1778）の政治的な読解を試みるが、これは同時に、証言についての省察ともなろう。実際、１８世紀文学の専門家たちと歴史家エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリとのあいだで生じた方法論にかんする重要な論争において、中心的に扱われたのはこのレチフのテクストであった。農民から作家となった人物に帰せられた作品『我が父の生涯』は農村生活についての証言として利用できるのかどうか、その可能性こそが、まさにこの論争において争われていたのである。われわれが確認しえたのは次の点である。たしかに、文学テクストの透明性の問題について、文学研究と歴史研究は対立しており、また、この論争の参加者たちはそれぞれ異なるイデオロギーを持っているが、そうした対立や立場のちがいにもかかわらず、彼らはみな、文学とは、その時代の真理を神話の形態において表現するものであるとみなす点で一致している（『我が父の生涯』はこうして、民衆出身の知識人の起源／出自にかんする神話的物語とみなされる）。私見によれば、レチフは、農村出身の知識人の視点から農村と農村生活を描いたのではない。彼は、エクリチュールによって、農村を政治的な場、すなわち、王権にとってモデルとなるような家父長制的な権力の場にしたてあげたのである。われわれとしては、『我が父の生涯』が証言行為であるのは、まさにこの点においてであると考えたい。

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ（1734-1806）は、ブルゴーニュ地方サシの農家に生まれ、印刷職人をへて作家となった、18 世紀フランスのきわめて特異な存在。膨大な数の作品を残したが、とりわけ、自伝的な書簡体小説『堕落百姓』（1775）や多くの虚構を含む自伝『ムッシュー・ニコラ』（1794-1797）、「夜の観察者」（左図）を自認して首都をルポルタージュする『パリの夜』（1788-1794）、売春をめぐる改革提言を行う『ポルノグラフ』（1769）などで知られる。『我が父の生涯』は、父親の姿を描くとともに、それを通して、農村とパリとの関係、それぞれの場所における主体と幸福のあり方、農村改革など、社会的な問題をも提示した興味深いテクストである。

ニコラ・シャピラ氏はマルヌ・ラ・ヴァレ大学准教授、ダイナ・リバール氏は社会科学高等研究院（EHESS）准教授。ともに、「文学事象の歴史に関する学際的研究グループ」(GRIHL)の共同責任者を務める。著書に、17-18 世紀フランス史の大家クリスチアン・ジュオーとの共著『歴史、文学、証言──時代の不幸を書くこと』（*Histoire Littérature Témoignage. Ecrire les malheurs du temps*, Paris, Gallimard, collection Folio Histoire, 2009）等がある。